水戸市飯富地区における地域資源のシェアリングを通した地域コミュニティの編みなおし

（自治体等側）水戸市住宅政策課・課長
砂川　和敏
（大学側）全学教育機構・助教
伊藤　雅一

連携先

茨城県水戸市

プロジェクト参加者

砂川　和敏（水戸市住宅政策課・課長、担当：事業責任者）
中島　大輔（水戸市住宅政策課・政策係長、担当：企画・調整）
伊藤　雅一（全学教育機構・助教、担当：企画、運営、とりまとめ）
胡　安琪（全学教育機構・助教、担当：企画、運営）
伊藤　哲司（人文社会科学部・教授、担当：企画、運営）

プロジェクトの実施概要

①プロジェクトの目的

水戸市飯富地区（田野町、成沢町、飯富町、藤井町、岩根町、藤が原）は、古代より人々が暮らした証の古墳群がある地域で、創建1000年以上の神社（大井神社、藤内神社）や加倉井砂山が開いた日新塾(水戸市指定史跡)などからも長い歴史を誇っていることがわかる。那珂川、田野川、藤井川、西田川がつくりだした肥沃な土地での田畑の耕作が盛んである一方、低地の地域では、2019年の台風19号（令和元年東日本台風）をはじめとした水害と幾度となく向きあってきた。

かつては茨城交通茨城線（鉄道）が走り、水戸街中やそれ以遠との人流・物流が盛んであったが、現在では少子高齢化が進み、水害や気候変動による豪雨災害の頻度の高まりの影響もあって空き家が目立つようになってきている。車社会において、水戸街中とのアクセスが良好である一方、若年層が地区内で生活する展望を描きにくくなっている。これに伴い、子ども会等の地域集団の維持が難しくなりつつある。ただこうした課題は、人口3,713人、5～14歳人口467人（2022年4月1日時点）の飯富地区において、コミュニティの編みなおしによってなお改善しうる。

2019年10月に来襲した台風19号（令和元年東日本台風）の直後、茨城大学は、台風19号災害調査団を組織し、調査・支援活動を展開した。飯富地区も被災地のひとつであり、調査・支援活動をしてきた場所である。

そのような中､地域住民より空き家活用のひとつとしてシェアハウスという案が挙がってきた。一方で学生たちは、コロナ禍による対面コミュニケーションの機会や場の不足を背景に、シェアハウスやコミュニティスペースを求める案が出てきた。飯富地区は、茨城大学水戸キャンパスから3km～8kmの範囲に位置し、好アクセスであるものの、現状では学生たちがあまり訪れない地域である｡そこで、地域住民と学生の声をマッチングし、地域資源の（再）発見と共有（ソフト面、ハード面を含めた広い意味でのシェアリング）を展開する地域連携プロジェクトとしての事業化を計画した。

②連携の方法及び具体的な活動計画

本事業では、その可能性を追求し、地元住民と学生・教職員とが協働し、地元企業等の理解と協力も得ながら、シェアハウスやそれに代わるコミュニティスペース設立を視野に入れた取り組みを展開し、この取り組みを通していかに人々がつながり地域コミュニティ

を編みなおせるかということを追求する。なお､飯富地区の多くが市街化調整区域であり、空き家のシェアハウス等への転換には規制が厳しいことは承知している。そのためまず､1日のみの地域イベントの活性化（点)、期間のある地域活動の展開（線)、中長期的な地域資源の利活用（面）を見据える。今年度のみでは具体的なシェアハウス的なものができるところまでには至らないと予想されるが、年度内に次の４点に傾注したいと考えた。

a. 学生･教職員が地域イベント(神社の祭り、市民運動会等）に参加し、大学参加の地域活動の定着を企画する。(「点」の強化)

b. 飯富地区における地元住民、地元企業、大学、行政等が連携できる関係を構築する。（「点」から「線」「面」に向けた関係強化)

c. 空き家・空きスペース活用のシェアハウスやそれに代わるコミュニティスペース設立において、水戸市の助言を受けながら、乗り越える必要がある地域課題や制度状況を明確にする。(地域の求める「線」「面」の明確化)

d. 本事業を通して、地区内外の多様な人々や地域資源の存在を明らかにし、そのことを周知する企画（展示企画やコミュニティカフェなどを想定）を一定期間行うことで、空き家活用のシェアハウスやそれに代わるコミュニティスペース設立の機運を高める。（「面」展開に向けた「線」の展開)

③期待される成果

地域資源のシェアリングを介した多様な人々の継続的な関係（再）構築―地域コミュニティの編みなおし―を進展させる。次年度以降も活動を継続し、空き家・空きスペース利活用と地域社会（再）構築のモデルケースを提示することを目指す。

プロジェクトの実施成果

① 活動実績

本プロジェクトの活動実施の準備段階について述べておく。飯富地区における伝統的な地域拠点である大井神社、藤内神社を訪れ、宮司や氏子からお話を伺い、地域コミュニティの現状やかつての繁栄期の様子などを教えてもらい、本事業についても住民発案であることを確認している。神社敷地内にある集落センターや神輿小屋なども見学させてもらい、それらも地域資源であり、地域活動の拠点になりうると考えた。

資金調達などの面でも不可欠な地元企業との連携もできつつある。例えば、2019 年の水害後に被災家屋を活用して蕎麦屋を開いた、訪問介護サービスが本業の(株)ゆりかごは、地域活動の拠点づくりに意欲的に取り組んでおり、本事業との連携も視野に入ってくると予想していた。

こうした前段階のもと、本プロジェクト採択後の主な活動実績は以下、表１のとおりである。

表１　主な地域活動への参加や企画

2022 年	
7/2	飯富ワークショップ(飯富市民センター）実施
7/31	藤内神社　夏越祭　～花火大会ボランティア参加
10/29・30	日本質的心理学会ポスター発表
11/5	飯富地区自転車ツアー実施
11/7	藤井町まちづくり研究会　参加
11/27	飯富まつり（飯富小学校）参加
2023 年	
2/18・19	飯富からはじめる地域づくり～みんなで踏み出すはじめの一歩～（飯富市民センター）実施

７月２日のワークショップでは、本プロジ

ェクトのメンバーである伊藤哲司を中心としたインタビュー調査結果をうけて、デジタル地図上に地域に関する語りをプロットした「語りマップ」（Google マイマップ機能の利用）を参加者に提示しつつ、水害時の状況や、おだやかな川で遊んだ記憶などを語り合い、地図上に追記していった。ワークショップ後半には、地域の未来について語り合うグループをつくり、この場限りの議論に終わらない意識を共有した。

7 月 31 日の藤内神社の夏祭りである夏越祭（なこしまつり）は、コロナ禍で開催されなかった 2021 年の 1300 年祭も含めた意味合いをもち、宮司や氏子から学生らのボランティア参加の依頼をうけて参加した。祭り開催の打合せから参加をし、スタッフ用の T シャツづくりや、茅の輪づくりなどに学生も加わった。夕刻には、小学生の子どもをもつ親の会が中心となり約 30 分間の打ち上げ花火が上げられ、地域住民や学生たちの地域活動の経験となった。以上 2 つの取り組みは、茨城新聞の記事となり広く周知されるに至った。

図 1　夏越祭の様子

10 月の質的心理学会における発表は、7 月のワークショップの成果を中心とした内容で、ポスター発表部門の賞を得る成果があった。

11 月 5 日の自転車ツアーでは、学生の有志と飯富地区をまわり、水害後の堤防の様子、自然豊かな風景、鉄道の名残、神社や集落センターなどの拠点をめぐった。地域住民による歴史案内や、集落センター内の水害記録の説明など、地域資源を実際に見て回る機会となった。

こうした地元住民と学生・教職員の関係構築が進む中、藤井町で行われたまちづくり研究会や、飯富小学校でおこなわれた飯富まつりなどの参加に結びついた。

図 2　自転車ツアーの様子

図 3　集落センターで水害記録をみる様子

以上、主な地域活動の一部を具体的に挙げてきた。準備段階を含めると約 1 年間の活動を展開してきたが、活動ごとに地元住民と学生・教職員のメンバーが異なるため、年間を通した活動の共有や振り返りの機会が必要であると考えた。その機会をつくるにあたり、中心的な役割を果たしたのが、以下の飯富地区コアメンバー会議である。

表2　飯富地区コアメンバー会議の実施状況

2022年	
第1～5回	9/9，9/23，10/10，11/6，12/10・11（第5回は2度実施）
2023年	
第6～8回	1/7，1/21，2/4

飯富地区コアメンバー会議とは、伊藤哲司が呼びかけて開始した、飯富地区の活動や今後のまちづくりについて話し合う集まりである。「コア」とあるが、特に意味はなく、興味関心のある地域住民・地元企業・学生・教職員などが、ゆるやかなつながりの中で意見交換をしつつ、地域活動やまちづくりを具体化するために知恵を出し合う場として運営されている。2月18･19日の地域交流イベント「飯富からはじめる地域づくり～みんなで踏み出すはじめの一歩～」実施までの具体的な打ち合わせは、この場を活用して共有し、地域住民へ発信してきた。なお、このイベントの名称を考案したのは学生たちである。

地域交流イベント「飯富からはじめる地域づくり～みんなで踏み出すはじめの一歩～」では、展示企画、交流企画、発表企画の三本柱を同じ場（飯富市民センター）で2日間行うこととした。資料添付している広報チラシを本プロジェクトメンバーの胡安琪が作成し、飯富地区内での回覧、水戸市のSNSでの告知が展開された。イベント概要は以下のとおりである。

〇展示企画（2月18・19日）
- 本プロジェクトを中心とした約1年間の活動報告
- 質的心理学会ポスター発表や、本プロジェクトに関連する卒業論文の展示
- 様々な地図の同時展示
  - 藤内神社で長らく広げていなかった古地図の写真（地租改正に伴い作成）
- 地域住民である郷土史研究家のアドバイスのもと、地理的把握のための航空写真（1974年、2012年）
- 立体地図（常陸国道河川事務所提供）
- 「語りマップ」体験コーナー、夏越祭の映像記録閲覧コーナー
- 関連企画の広報
- 水戸市立博物館企画展「那珂川ヒストリー」のポスター展示と図録の回覧
- 人間文化研究機構国文学研究資料館と茨城大学地球・地域環境共創機構の共同セミナー「歴史資料を活用した減災・気候変動適応に向けた新たな研究分野の創成」のポスター展示

図4　展示の概観

図5　「語りマップ」体験および、夏越祭の映像記録閲覧コーナー

本プロジェクトメンバーの伊藤雅一が展示を取りまとめ、茨城大学の学生や教職員が飯富地区とどのように関わってきたのかが共有されるよう構成した。また、複数の地図を近接展示することで、自然と地域に関する会話がうまれるよう構成した。

図６　地図を囲んで語らう様子

〇交流企画（18 日午後、19 日午前）
・地域住民提供の飲料可能な湧水で淹れたコーヒー、緑茶の提供
・手作りベンチと焼き芋の提供（水戸市社会福祉協議会飯富支部の企画実施）
・健康体操（(株)ゆりかごの企画実施）

図７　屋外ベンチの様子

屋内メイン会場では、胡安琪が学生にコーヒーの淹れ方をレクチャーしつつ、来場者の休憩スペースを兼ねた交流の場を設置した。市民センター2 階の和室では、(株)ゆりかごによる健康体操がレクチャーを含めて実施され、多世代交流のきっかけとなった。屋外駐車場では、水戸市社会福祉協議会飯富支部によるベンチ設置（同団体の過去の企画で地域住民が作成したベンチ）とストーブを用いた焼き芋の提供が行われ、社会福祉協議会の取り組み周知にもつながった。

〇発表企画（19 日 13～15 時）
・学生による活動報告
・ゲスト講師による講演「百聞を一見にするふるさと絵屏風」(滋賀県立大学地域共生センター講師：上田洋平氏)

先の飯富地区コアメンバー会議を契機に、飯富地区に興味関心のある学生グループが構成されつつある中、このメンバーたちによる飯富地区での活動報告が行われた。続けて、質的心理学会での発表をきっかけに研究交流に至った上田洋平氏を招き、地域住民が主体となって地元の絵屏風を作成する実践について講演を行った。

地域住民が学生の姿を実際に見ることや、他地域の事例を知ることを通して、今後の地域活動展開に向けた機運の向上につながった様子が垣間見えた。

図８　講演の様子

② プロジェクトの達成状況

本プロジェクトで傾注した４点について、順に述べていく。

a. 学生･教職員が地域イベント（神社の祭り、市民運動会等）に参加し、大学参加の地域活動の定着を企画する。（「点」の強化）

⇒　先に報告した約１年間の取り組みにより、飯富地区と大学側の関係性強化が大いに進んだと考えられる。来年度の藤内神社、大井神社への学生参加をはじめとした、地域活動への協力を求める声が地域住民から既にあがっている。

b. 飯富地区における地元住民、地元企業、大学、行政等が連携できる関係を構築する。（「点」から「線」「面」に向けた関係強化）

⇒　地域住民・地元企業・学生・教職員などが議論をしあう飯富地区コアメンバー会議を立ち上げ、本プロジェクトが終了後も継続的に場を維持していくことが予定されている。このことからもわかるように、連携体制の構築に一定の成果があったと考えられる。

c. 空き家・空きスペース活用のシェアハウスやそれに代わるコミュニティスペース設立において、水戸市の助言を受けながら、乗り越える必要がある地域課題や制度状況を明確にする。（地域の求める「線」「面」の明確化）

⇒　先に挙げた連携体制の進展の一方、行政との連携には、より具体的な地域活動や地域構想が必要であることが明らかになりつつある。こうした展開に至るために、より綿密な議論が必要であるとの課題も浮かび上がってきた。ただ、学校を中心としたコミュニティスクールのようなコミュニティの（再）構築や、那珂川流域という広い視野に立った治水まちづくりの展開など、スケールの異なる地域活動を並行的に行っていくことで課題対応していくという方向性は見えつつある。

d. 本事業を通して、地区内外の多様な人々や地域資源の存在を明らかにし、そのことを周知する企画（展示企画やコミュニティカフェなどを想定）を一定期間行うことで、空き家活用のシェアハウスやそれに代わるコミュニティスペース設立の機運を高める。（「面」展開に向けた「線」の展開）

⇒　本プロジェクトがなければ、古地図の発見と大々的な公開や、湧水を味わう機会、飯富地区としてのキーパーソンが集う場などは実現しなかった。約１年間の取り組みを２日間の地域交流イベントに結実させたことで、地域資源の情報共有や、新たな地域活動展開の機運を高めることができたと考えられる。

③ 今後の計画と課題

当初の期待される成果として挙げていた、地域資源のシェアリングを介した多様な人々の継続的な関係（再）構築については、着実な進展に至ったと考えられる。一方、より具体的な地域活動や地域構想が必要であるという課題も明らかになってきた。

引き続き、本プロジェクトの蓄積をふまえて、次年度以降も地域コミュニティの編みなおしを追求し、地域社会（再）構築のモデルケース提示に至ることを目指していきたい。

資料　地域交流イベント「飯富からはじめる地域づくり～みんなで踏み出すはじめの一歩～」
　　チラシ